

# 第1次世界大戦前後のウィーンにおける ユダヤ・サッカークラブの台頭 ——S.C. ハコア・ウィーンの歴史(2)——

古 田 善 文

## はじめに

前稿<sup>1)</sup>において筆者は、オーストリア＝ハンガリー帝国の末期、首都ウィーンのスポーツ界を席卷した反ユダヤ主義 (Antisemitismus) と、これに対抗すべく誕生したシオニズム (Zionismus) 支持者によるスポーツ機構改革の実態について検証した。

具体的に前者については、ユダヤ構成員の締め出しを意図したとされる1887年の「アーリア条項 (Arierparagraph)」がいかにしてウィーンの体操競技団体で採用されるに至ったかについての経緯と、これによるユダヤ構成員締め出しの実態を論証した。一方後者については、1898年バーゼルで開催された第2回シオニスト会議の席上、シオニズムの指導者ヘルツル (Theodor Herzl) に次ぐ論客マックス・ノルダウ (Max Nordau) が提唱した新しい対抗概念「逞しきユダヤ (Muskeljudentum)」の内容とその由来を紹介したうえで、さらにこの新構想が1909年のユダヤ複合スポーツ競技団体S.C. ハコア・ウィーン (S.C. Hakoah Wien: 以下ハコア) の成立に与えた影響についても、主要な先行研究<sup>2)</sup>の成果および当事者の回顧録などの一次史料を組み合わせつつ論じてみた。

ノルダウ演説の延長線上に誕生したウィーンのコア (コアとはヘブライ語で「力」を意味する：筆者補) は、その後、1914年に勃発した第1次世界

大戦という厳しい試練を乗り越えた後、1918年の帝政の崩壊とそれに続く第1共和制（1918-38年）の誕生という新しい政治社会状況の中、クラブ内最古のサッカー競技部門を中心にオーストリアを代表するスポーツ団体としてさらなる発展をとげていくことになる。

本稿は、1909年のハコア・サッカー部門の誕生から、第1次世界大戦を経て、英国生まれの新しいスポーツであるサッカーの人気のオーストリアでも沸騰する中、このクラブが1924/25年シーズンに初めてプロ化されたウィーンのサッカーリーグ（つまり当時のオーストリア第1共和国におけるトップリーグ：筆者補）で優勝を収めるまでの台頭期を視野に入れている。

具体的な論点は、第1に、この時期のハコアの組織理念、組織構成および活動実態を具体的に検証するかたわら、当時のウィーンやヨーロッパにおける反ユダヤ主義にハコアがどのように直面したかを論じることである。第2は、ハコア・サッカーの魅力の原因を探ることである。1920年代に入ると、オーストリア内外を問わずハコアのサッカーの試合には常に大観衆が押し寄せたが、その原因を分析してこれに対する一応の結論を出すことも本稿の重要な課題である。

本稿の構成と使用する史料について述べると、次章ではまずサッカー部門を中心にした創成期のハコアの活動実態をハコアの機関紙を参照しつつ検討する。

第2章では、第1次世界大戦の勃発がハコアという組織および一般の構成員に与えた影響を検討する。あわせて前線においてサッカーが兵士の行動に与えた心理的影響を、当時ウィーンで発行されていた人気スポーツ紙『挿絵入りオーストリア・スポーツ新聞 (Illustriertes Österreichisches Sportblatt)』に掲載された戦場エピソードをまじえながら紹介する。

第3章では、第1共和国という新時代の訪れとともに顕著になるハコアの躍進状況を紹介するとともに、時代の変化にもかかわらず依然として彼らを取り巻く反ユダヤ主義的差別の実態を当事者の回顧録などの記述から明らかにする。

そして第4章においては、本稿の最大の主題であるハコアとその構成員およびファンを結びつけた諸要因を、同時期のドイツのサッカー・クラブの事例との比較を通じて推察し、これに関する筆者の仮説を提示して本稿のまとめとしたい。

- 1) 古田善文「19-20世紀転換期ウィーンのスポーツ界における反ユダヤ主義とシオニズム——S.C. ハコア・ウィーンの歴史(1)——」『獨協大学ドイツ学研究』第72号、獨協大学ドイツ語学科、2017年3月、1-27頁
- 2) ハコア研究の出発点となった著作が以下の成果である。John Bunzl (Hrsg.), *Hoppauf Hakoab. Jüdischer Sport in Österreich, Von den Anfängen bis in die Gegenwart*, Wien 1987 その他、1995年の展覧会カタログに以下がある。Jüdisches Museum der Stadt Wien (Hrsg.), *HAKOAH. Ein jüdischer Sportverein in Wien 1909-1995. Zur Ausstellung „HOPPAUF HAKOAH“. EIN JÜDISCHER SPORTVEREIN IN WIEN 1909-1995 im Jüdischen Museum in Wien, 5. Mai bis 30. Juli 1995*, Wien 1995 ハコア誕生から100年となる2009年に、ハコア研究の一応の集大成となる以下の著作が公刊された。Susanne Helene Betz / Monika Löscher / Pia Schölnberger (Hrsg.), *„... mehr als ein Sportverein“. 100 Jahre Hakoab Wien 1909-2009*, Innsbruck/Wien/Bozen 2009 その他、ハコアを含めた欧州のユダヤとサッカーの関係を広く扱った重要な研究書に以下がある。Dietrich Schulze-Marmeling (Hrsg.), *Davidstern und Lederball. Die Geschichte der Juden im deutschen und internationalen Fußball*, Göttingen 2003

## 1. 創成期におけるハコア・サッカー部門の活動 (1909年から第1次世界大戦の勃発まで)

### (1) シオニストによる複合スポーツ競技団体としてのハコア

1909年に誕生したウィーンの手コアは、これに先立って成立した他の純粋なユダヤ体操競技団体とは異なり、オールラウンド型のスポーツ競技団体という特色を持っていた。と同時に、ハコアは単なるスポーツ愛好団体ではなく、明白にシオニズム運動の成功を強く意識して作られた団体でもあった。

1909年に作成されたクラブ規約を簡潔に紹介すれば、その目的として掲げられていたのは次の4点である。

- ① 他の団体で反ユダヤ主義や「アーリア条項」のために活動ができないユ

ダヤのスポーツ選手を糾合すること。

- ② 運動能力の育成とその使用によってユダヤの戦闘力 (Wehrhaftigkeit) とユダヤの自覚 (Selbstbewusstsein) を訓練すること。
- ③ ユダヤが体力と能力において非ユダヤ系住民にいささかも劣っていないことを世間一般、同胞、敵対する反ユダヤ主義者に証明すること。
- ④ ユダヤの民族的自覚を育成すること<sup>1)</sup>。

ハコアの指導者たちにはシオニストが多かったが、勢力拡大のための戦略的意図なのだろうか、規約上には新天地建設のためにウィーンを捨てることを意味する急進思想シオニズムという言葉は一言も使用されていない。シオニズム思想は、ユダヤ教徒であることを隠してウィーン社会との同化をめざす多数派の「同化ユダヤ」からは警戒されていたこともあり、シオニズムを前面に押し出すことは、例えば新規構成員の獲得やファンの開拓にとってはマイナスとなる可能性もあった。そういった配慮のためか、ここではシオニズムという直裁的表現の代わりに、「ユダヤの民族的自覚の育成」という言葉が採用されている。もちろんユダヤを民族と見るこの視点は、これはこれで保守的で同化主義的なウィーンのユダヤ市民には十分刺激的すぎる表現ではあったが<sup>2)</sup>。

## (2) ハコアの組織構造とサッカー部門の初期における活動状況

ハコアの競技部門として最初に設けられたのはサッカー部門 (1909 年) であった。さらに時代が進むにつれクラブ内には水泳 (1911 年)、陸上およびホッケー (1912 年)、スキー、ツーリズム、レスリング、卓球、チェス、テニス (1919/20 年)、ハンドボール (1921 年)、フェンシング (1922 年)、アイスホッケー (1928 年) と多彩な競技部門があらたに増設されていく<sup>3)</sup>。しかしながら興味深いことに、ノルダウが第 2 回シオニスト会議における演説の中で、青少年の健全な身体育成の「鍵」として強く推奨した体操競技部門は、ハコアには最後まで併設されることはなかった<sup>4)</sup>。

後の両大戦間期になると、ハコアはサッカー部門での華々しい成果とならんで、競泳競技部門やレスリング競技部門の活躍によってますます世間の注目を



集めることになる<sup>5)</sup>。しかし何と言っても、ハコアの代名詞となったのは成立当初から存在したサッカー競技部門であった。有力選手を抱えることに成功したハコアは、ウィーンの下部リーグから数年のうちにトップリーグへの昇格をはたし、オーストリア初のプロ・サッカーリーグが誕生した最初の年、つまり1924/25年シーズンには、居並ぶ強豪チームを尻目に見事にチャンピオンシップを獲得するに至った。以下、サッカー競技部門の発展過程を詳しく見ていこう。

前稿でも紹介したように、ハコア成立の直接の契機となったのは、ハコア結成の前年にあたる1908年に、ウィーンでブダペストの強豪ユダヤ・サッカークラブ „Vivo es Athletkai Club Budapest“ と „Vienna Cricket and Football Club“ の補欠チーム (Reserve) が親善試合を行ったことであった。試合後、ブダペスト側からの熱心な働きかけもあり、事態はハコア結成の方向に進む<sup>6)</sup>。

創成期におけるハコアの活動の中心的存在がシオニストとしても有名なフリッツ・レーナー (Fritz Löhrner) とイグナツ・ケルナー (Ignaz Hermann Körner) 両名であった<sup>7)</sup>。彼らは、ウィーンを貫流するドナウ河の氾濫危険区域やプラーターで当時草サッカーに興じていたユダヤの青少年を集め、1909年にスポーツクラブとしてハコアを設立した<sup>8)</sup>。なお、ハコアの公式の設立集会は1909年9月26日にウィーン9区 (Hörlgasse 11) の「ユダヤ学生読書・演説ホール (Lese- und Redehalle jüdischer Hochschüler)」内の酒場で開催された。当事者の回顧録によればこの集会にはウィーンに住むシオニズム指導者たちも数人参加したとされる<sup>9)</sup>。

当時のメンバーの回顧録を読んでみると、初期のハコアのサッカー部門は何をおいても練習場の確保に苦労させられたことがわかる。1909年に誕生したハコア・サッカー部門は、その初期においては固定練習場を見つけることができずに、多年にわたる流浪生活を強いられたようである。ようやく1913年になって、ウィーン郊外の22区フロリツドルフのブルックハウフェン (Bruckhausen) にある宿屋の女主人ビルナー氏 (Amalie Birner) から練習用の土地を借用することができたとされる。とにかくその練習場は劣悪な状態ではあった

ものの、他に換わる場所をみつけることもかなわず、この土地でハコアの選手たちは練習のみならず試合も行ったとされる<sup>10)</sup>。チームとしてハコアが臨んだ最初の試合はフロリッツドルフのコロンビア (Floridsdorfer Columbia) 戦で、ハコアはこの試合に 10:0 で敗戦している<sup>11)</sup>。

この頃、他の草サッカー・チームから多くの選手がハコアに加わり、短期間のうちにチーム強化がなされていく。そのうち初期の発展において特筆すべきは、ハコアと同時期に結成された「スポーツクラブ 1908 (Sportklub 1908)」という名前のユダヤ学生チームとの組織的合意であった。「スポーツクラブ 1908」は、その人員構成上もハコアと多くの類似点をもっていたこともあり、当初はハコアのライバルとみなされていた。当時の記録文書によると、このチームの学生たちがハコアの思想に惹かれて次から次へとハコアに移籍したため、数週間のうちに「スポーツクラブ 1908」はハコアに吸収されてしまったとされる。両チームの合意により、ハコアに最初の対外的競技チーム (Kampfteam) が形成された。また、この合意によりハコアは団員の数を大幅に増加させ、競技力という点においても著しい強化に成功した<sup>12)</sup>。

1910 年にチームに参入したアルトゥール・バール (Arthur Baar)<sup>13)</sup> のリーダーシップのもと、ハコアは 1912 年に 22 区のフロリッツドルフに小さな陸上競技場を獲得し、翌年には当時所属していたウィーン 3 部リーグから 2 部リーグへの昇格も果たしている。存在感を高めるサッカー部門の躍進は、この団体への新規メンバーの大量参入をもたらし、競技部門も相次いで増設された<sup>14)</sup>。

このように、その初期において順調な成長過程を辿ったハコアではあったが、その流れを阻害する大事件が 1914 年の夏に起きた。いわずと知れた第 1 次世界大戦の勃発である。ハコアに限らず、オーストリア＝ハンガリー帝国のスポーツ団体は、中核をなす構成員の多くを出征兵士として供出することを余儀なくされ、大戦初年には同国でのスポーツ活動は完全に停止した<sup>15)</sup>。

なお、一説によるとこの大戦にオーストリア＝ハンガリー帝国側の兵士として志願したユダヤ市民は 30 万人にのぼったとされる<sup>16)</sup>。

- 1) Bunzl, *a.a.O.*, S.24
- 2) Monika Löschner, „...aus den verlachten Judenjungen sind nun doch junge Juden geworden...“, in: Susanne Helene Betz / Monika Löschner / Pia Schönlberger (Hrsg.), *a.a.O.*, S.25
- 3) Elias Schapira, „Der S.C. Hakoah — ein Pionier der jüdischen Sportbewegung“, in: SC Hakoah (Hrsg.), *S.C. Hakoah Wien. 1909–1954*, Wien 1954, S.1
- 4) 筆者は別稿において、①ハコア成立とノルダウ演説との間には10年のタイムラグが存在すること、②1900年代になってイギリス生まれの自由な雰囲気の新しいスポーツであるサッカーが伝統的な体操競技よりも若者の心を掴んだこと、をその理由として指摘した。前掲拙稿、21–22頁を参照されたい。
- 5) ①水泳は女性部門、男性部門、青少年部門で多くのウィーン市およびオーストリア第1共和国チャンピオンのタイトルをとった。いわゆる「河川競泳選手権 (Strommeisterschaften)」と「ウィーン横断競泳戦 (Quer durch Wien)」などの野外競泳大会においてハコアは、多年にわたってその参加者数と勝利数により最も成功を収めたクラブとなった。1928年のヨーロッパ選手権では Hedy Bienenfeld-Wertheimer と Fritz Löwy がトップ3に入ったが、これはヨーロッパ選手権におけるオーストリア女性水泳選手が成し遂げた初の快挙だった。1930年代には新たな有力選手たちがハコア水泳部門に加入し、華々しい成功を収めている。Judith Deutsch、Ruth Langer、Lucie Goldner、Annemarie Pick は上述した Löwy、Bienenfeld-Wertheimer とともにオーストリア・チャンピオンとなり、多くのリレー競技で成功をおさめている。しかし、1936年には Judith Deutsch、Ruth Langer、Lucie Goldner がヒトラー政権下で実施されるベルリン・オリンピックへの出場を拒否、そのため彼女たちはオーストリア水泳連盟から出場禁止処分を受け、戦後までその記録も剥奪された。②水球選手たちも1926年から1928年まで連続してオーストリア・チャンピオンのタイトルをとっている。1936年には新たに結成された若き水球チームがウィーンのチャンピオンシップを獲得した。③ハコアは格闘技にも秀でていた。ハコアのレスリング選手たちはオーストリアの最強のクラブに発展し、反ユダヤ主義的な襲撃に対する「防衛部隊」にもなった。実際、1924年の段階で100名以上のメンバーがレスリングのトレーニングを積んでおり、最も有名なハコアのレスリング選手である Micki Hirschl は、1932年のロサンゼルス・オリンピックで銅メダルを2個獲得している。以上、Karl Haber, „Kleine Chronik der Hakoah Wien – Teil I: 1909–1938“, in: Jüdisches Museum der Stadt Wien (Hrsg.), *a.a.O.*, S.27ff
- 6) ハコア結成の詳細については前掲拙稿、22–23頁を参照されたい。
- 7) 初代のハコア会長レーナーは法学博士の学位を持ち、彼の手による詩や文学作品はよく知られていた。第1次世界大戦の勃発まで会長職にとどまった。戦前彼が毎年主催し、戦後も数回開催された「ベータの夕べ (Beda-Abende)」はとても人気を博した文化行事で、その収益はクラブに多大な利益をもたらした。1921年、レーナーはハコアの名誉会員に任命され、後年の会長不在期には1年間だけ会長職に再度選出されている。ナチによる1938年の独逸合邦直後、レーナーは強制収容所に収監されてひどい扱いと苦しみを受け、最終的に1942年12月4日、アウシュヴィッツでその一生を終えている。David Bolchover, *The Greatest Comeback. From Genocide to Football Glory*, London 2018, p.24f; Ignaz Hermann Körner, *Lexikon jüdischer Sportler*

*in Wien 1900-1938*, Wien 2008, S.142 一方、1889年生まれのイグナツ・ケルナーは、若い頃からオールラウンド・スポーツマンとして有名であった。体操の他、自転車競技、サッカー、水泳競技、スキー競技などで活躍した。1909年のハコア創設時には創設者の一人として名を連ねている。彼の私財によってハコアは最初の運動場を獲得した他、水泳部門が使用するプールの賃借も実現している。彼はシオニズムの熱烈な支持者でもあり、1913年ウィーンでの第13回シオニスト会議の開催に大きく貢献した。1921年にハコアの名誉会長に就任、ハコアの成功を近くから見守った。1938年3月の独逸合邦以降はハコア団員の保護に尽力したが、同年10月、全財産を放棄してパレスチナに渡っている。Körner, *a.a.O.*, S.117ff

- 8) Haber, *a.a.O.*, S.23; *Die Hakoah. Ihr Weg von der vierten in die erste Klasse*, Wien (o.J.), S.3
- 9) Arthur Baar, *Fußballgeschichten. Ernstes und Heiteres*, Hakoah, Wien, Printed in Israel 1974, S.7
- 10) Haber, *a.a.O.*, S.23
- 11) *Die Hakoah. a.a.O.*, S.4
- 12) Ebenda, S.4f
- 13) アルトゥール・パールは、初期のハコアに合流した「スポーツクラブ1908」の出身である。第1次世界大戦中に選手の大半を出征させたクラブの存続に努力したパールは、前線兵士との連絡を保つために『ハコア通信 (Hakoah-Nachrichten)』を創刊し、定期的に慰問袋を前線の兵士に配送した。戦後はジャーナリストとして、『新ウィーン・スポーツ新聞 (Neues Wiener Sportblatt)』を発行し(1918-23年)、1938年までハコアのために尽力した。独逸合邦の年である1938年に彼はパレスチナに移住し、当地におけるスポーツ組織「ハポエル (Hapoel)」の育成に自らの知識と経験を駆使したと言われている。Körner, *a.a.O.*, S.14f
- 14) Haber, *a.a.O.*, S.23
- 15) *Die Hakoah, a.a.O.*, S.5
- 16) Bolchover, *a.a.O.*, S.24

## 2. 第1次世界大戦の勃発とハコア存立の危機

### (1) 大戦中のハコアと出征兵士

著名なハコアの指導者である前出のパールは当時の団員が世界大戦にあたって抱いた心情を次のように代弁している。

「第1次世界大戦が勃発した。ハコアのメンバーたちは自分たちが試金石の上に置かれていると信じた。かれらは平和時においても、ユダヤは肉体的に劣っており臆病者である、という偏見に対して戦うように教育を受け

ていた。そしてこの緊急事態にそれを証明しなければならぬと信じていた。こうしてかれらは犠牲を厭わず前線に赴いた。多くは将校や下士官として、他のものは普通の兵士として。(…)。帰還したものの中には多くの身体障害者がいた。かれらは戦死者と同様、団体の『黄金の書 (Das Goldene Buch)』にその名が記載された。』<sup>1)</sup>

欧州各地の戦線に構築された塹壕のなかで大量の砲弾を浴びたユダヤ兵士たちの心情は察するばかりであるが、その頃ウィーンに残った年少のハコア団員や指導部の面々も戦争がもたらした新たな難題に直面していた。それは中核団員の出征によって年会費が徴収できず、クラブが深刻な運営資金不足の危機に陥ったことである。

当時の執行部のひとり、大戦がもたらした難題について次のように回顧している。

「1916年当時、我々には数少ない一時帰還者の他には15歳から17歳の少年しか残されていなかった。そうした少年たちは団体をスポーツ面で代表する他、困難な財政的な諸問題もなんとか克服しなければならなかったのである。毎回、場所代 (Platzmiete) の支払い日がやってくる度に、絶望的な雰囲気支配した。というのも、必要額の100クローネは中学生や見習いの徒弟たちには到底賄えなかったからだ。』<sup>2)</sup>

かかる財政難に直面したハコアは、苦肉の策として「イスラエル文化協会 (die Israelitische Kultusgemeinde)」に支援を依頼した。しかしながら、この協会は当時、ユダヤ市民の社会的同化に賛同するブルジョア＝保守的な「オーストリア・ユダヤ組合 (Union österreichischer Juden)」のメンバーを主流派に抱えていたため、シオニズム団体と目されたハコアの指導者たちは即座に支援拒否の返事を受けることになってしまった<sup>3)</sup>。「我々はシオニズム的団体を育成することに関心は持たない!」<sup>4)</sup>これがイスラエル文化協会の明白な回答

であった。

こうした苦境にもかかわらず最終的にハコアが世界大戦という大きな苦難を乗り越え、その後もスポーツ活動を継続することができたのは、ハコアの臨時総会における長時間の議論の末、数人の構成員が必要な財政的措置を講じるために私財を投じたからだとされる<sup>5)</sup>。

このようにウィーンのコアは第1次世界大戦の期間を通じて組織の維持・運営に苦労したが、戦場で銃火にさらされるメンバーらにとって、コアの存在は精神的支柱としてかけがいのないものであった。

それは、オーストリアの戦争委員会の指導を受けていた団体は、コアを含め戦争中も欧州の戦場に散らばったメンバー達とのコンタクトを保つことが可能であったことによる。そうした連絡手段として重要な意味をもったのが、コアの場合、団体が発行する会報であった<sup>6)</sup>。

「毎週、『コア通信 (Die Hakoah-Nachrichten)』が発行され、前線のコア構成員に向けて発送された。この通信は、コアの情報やスポーツ関連報道の他、戦場の友人達の情報を含んでおり、構成員はこの通信を通じて互いのコンタクトを保つことができたのである。『コア通信』は戦場の若者たちにとっては故国に通じる貴重な情報源となったため、ユダヤ兵士だけではなく、塹壕内ではキリスト教徒の戦友たちにも愛読された。』<sup>7)</sup>

会報の他、6週間に1回の頻度で、コアからは構成員に慰問袋 (Liebesgaben-sendung) も配送された。タバコ、菓子、読み物などがその中身であった。これらは、コアの構成員には物質的恩恵を当然のように与えることになったが、加えてこうした慰問事業が前線の兵士にとっては精神的に重要な支援となっていたことを忘れることはできない。つまり、こうした事業そのものが、故郷の家族や仲間たちが、野外で厳しい任務を遂行する出征兵士のことを決して忘れてはいないということを証明していたからでもある。そして、こうした

慰問事業を通じてハコアのメンバーと塹壕体験を共有した他の戦友たちは、必然的にハコアが単なるスポーツ団体ではないということも理解することになった。このことが、世間のハコアに対する注目を集めることになり、これまではこのクラブと距離を取っていた戦場のユダヤ兵士の多くが後年ハコアに加入する原因のひとつとなったと言われている<sup>8)</sup>。

## (2) 第1次世界大戦後のサッカーの拡大の背景

欧州戦線のほとんどどこでもそうであったように、オーストリアの下級兵士たちは長期に及んだ戦争中、将校たちからサッカーゲームを学ぶことになった<sup>9)</sup>。

欧州各国の軍部は、サッカーを前線兵士達の健全な余暇活動の選択肢のひとつとして考えていたふしがある。最も費用がかからず、同時に若者の肉体の健全な育成に役立つものがスポーツとしてのサッカーであった。こうして各国の将校はサッカーボールを戦場に持ち込み、このイギリス由来の新興競技のルールと技術を兵士たちに伝授し、共に競技する楽しみを若者たちと分かち合ったのである。

肉体的育成をかねた純粋な娯楽という本来の目的の他、次に示す例がしめすように、サッカー競技は日々定期的 to 実施される敵に向けての突撃作戦を「支援する手段」として利用されることもあった。1916年10月6日付のウィーンのスポーツ専門紙の一面には、イギリス軍が突撃にあたって兵士の恐怖心を緩和するために、サッカーボールを使用したことについての報道がなされている。

この挿し絵を説明するキャプションは、大隊のひとりの中隊長が4個のボールを入手し、ドイツ軍の塹壕に向けて攻撃を開始する際にこれらのボールを前方にキックすべしとの命令を出したこと、熱狂的なスポーツファンであったとされるこの大尉が後に他の無数の戦死したイギリス兵の間に発見されたこと、を伝えている<sup>10)</sup>。事実、紙面を見る限り、前方に向かって宙を飛ぶサッカーボールが数個確認できる(図版1参照)。とは言え、伝聞をもとに描かれたこ

の絵が示している内容の真偽のほどは定かではない。ただし、これが事実であったとすれば、サッカーが戦争に利用された悪しき例のひとつとなろう。なお、キャプションには、ここで描かれている戦場はフランス北部のコンタルメゾン (Contalmaison) 近郊であり、突撃する部隊はロンドン近郊のイースト・サーリー (East Surrey) 連隊だとする具体的説明があわせて付されていることを付言しておく<sup>11)</sup>。



図版 1 サッカーボールとともに突撃するイギリス軍将校と兵士たち (1916 年)

出典: Illustriertes Österreichisches Sportblatt, 6. Oktober 1916, S.1



いずれにしても第1次世界大戦を契機として欧州におけるサッカー人気に火がついたことには疑いの余地はない。戦場で初めてサッカーの楽しさに親しんだ下級兵士、つまり労働者階層が、戦争後、あらたに故郷に持ち帰った「土産」がサッカーという新興球技であった。

こうした戦場での経験に加えて、第1次世界大戦後の欧州各国では社会法制の変革によって余暇の確保が容易になったことも、労働者を含む勤労者階層間におけるサッカーの普及に大きく貢献した。いわゆる8時間労働制の導入である。1918年11月に誕生したオーストリア第1共和国でも、1919年12月に8時間労働制が導入されたことにより<sup>12)</sup>、他国の例と同様、労働者階層も余暇の増加の恩恵を被ることになる。

1920年代のオーストリアにおけるサッカー人気の沸騰は上述したような理由と関係していよう。つまり、これまで当時の社会的エリートであった大学生を中心にプレーされていたサッカー競技の大衆化がここに起こったのである。

- 1) Arthur Baar, „Nussbaum und der Oberleutnant“, in: Jüdisches Museum der Stadt Wien (Hrsg.), *a.a.O.*, S.34
- 2) John Bunzl, *a.a.O.*, S.48
- 3) Simon Schwaiger, *Sportklub Hakoah Wien. Ikone jüdischen Selbstbewusstseins*, Saarbrücken 2009, S.19
- 4) Ebenda, S.19f ; John Bunzl, *a.a.O.*, S.48
- 5) Schwaiger, *a.a.O.*, S.20
- 6) Arthur Baar, *50 Jahre Hakoah. 1909-1959*, Tel Aviv 1959, S.28
- 7) Ebenda
- 8) Ebenda
- 9) Detlev Claussen, BÉLA GUTTMANN. *Weltgeschichte des Fußballs in einer Person*, Berlin 2006, S.31
- 10) *Illustriertes Österreichisches Sportblatt*, 6. Oktober 1916, S.1
- 11) Ebenda
- 12) 1週間に6日の労働日であるから、週48時間労働と考えてよい。Peter Eigner / Andrea Helige (Hrsg.), *Österreichische Wirtschafts- und Sozialgeschichte im 19. und 20. Jahrhundert. 175 Jahre Wiener Städtische Versicherung*, Wien / München 1999, S.140

### 3. 第1次世界大戦後のハコアの躍進状況

#### (1) 戦後のハコアの隆盛とサッカー人気

第1次世界大戦後、オーストリアでは600年以上続いた帝政が崩壊し、あらたに共和制が誕生した。この新しい時代の息吹の中、サッカーと呼ばれるイギリス生まれの新興球技は、労働者が多く居住していたウィーンの郊外地域 (die Vorstadt) を中心に広まり、男性文化の重要な一部となった。毎週毎週、様々なサッカー場やスタジアムは一杯になり、1924年からは1部リーグ、2部リーグで開始されたプロ・サッカーリーグを訪れる観客数もうなぎ上りに増加した<sup>1)</sup>。

1919年12月14日、この日実施されたハコアとゲルマニア (Germania) との試合には実に15,000人の観客が詰めかけたが、これはこの試合が行われたW.A.C.(1897年創設のWiener Athletiksport Club: 筆者補) 競技場における動員観客数の新記録となった。1920年には、オーストリアの1部リーグ、2部リーグに所属するチームの他、ハンガリーのチームも参加して行われたウィーンの有力紙『ライヒスポスト (Reichspost) 』が主催するカップ戦でハコアは見事優勝を果たした。また2部リーグを制した1919/20年シーズン後には、ハコアは啖れて1部リーグ (The First Class League) のメンバーとなった<sup>2)</sup>。

昇格後の1920年の晩秋にウィーン郊外22区のフロリツドルフで行われたハコアと名門ラピッド・ウィーン (Rapid Wien) との一戦に詰めかけた大観衆の様子は当時の語り草となっている。当日 (1920年11月14日) の模様を伝えるウィーンのスポーツ新聞によれば、この日 (日曜) の正午頃から超満員の路面電車が次々にサッカー場に向かったが、試合開始後も新たなファンの群衆が押し寄せたため、路面電車だけでは群衆をさばききれなかった、とされる。その日の混乱ぶりはすさまじく、競技場前では実に200台以上の車が大渋滞を起こしていた。最終的に、この日の観客数は20,000人を超え、入場料収入も300,000クローネを上回ったが、これらはウィーンのローカルマッチとしては異例の記録破りの数字となった<sup>3)</sup>。ある研究者が形容した如く、「サッカー・

スポーツは郊外を征服した」<sup>4)</sup>のである。

サッカー人気の高まりに歩調を合わせるかの如く、ハコアの躍進はさらに続いた。1922年にはブダペスト出身の有力選手ベーラ・グットマン (Béla Guttmann)<sup>5)</sup>を獲得してチームの戦力アップにも成功した。1923年にはウィーン2区レオポルトシュタットのクリアウ (Krieau) に新しいハコアの専用競技場が完成した。この競技場は全部で25,000人の観客を収容でき、サッカー場、ハンドボール場、ホッケー場、テニスの他、多様な陸上競技用の練習場も包含していた<sup>6)</sup>。

こうしてハコアはその歴史において特筆すべき1924/1925年シーズンを迎えた。このシーズンから始まったウィーンのプロ1部リーグにおいて、ハコアは初代の覇者となり、栄華の頂点を極めることになった (下記の写真1、資料1を参照)。



写真1 ハコア・ウィーン：1924/25年シーズンの覇者

注：後列中央で優勝トロフィーを抱えるのがバル、その向かって右隣に立つのがグットマンである。

出典：Illustriertes Sportblatt, Jg.21, Nr.28, 11. Juli 1925, S.1

Die Professionalmeisterschaft.							
I. Klasse.							
Verein	Spiele	Siege	Un- entsch.	Verlor.	Tore für	gegen	Punkte
Hakoah . . . .	20	10	6	4	43	30	26
Amateure . . . .	20	10	4	6	36	28	24
Vienna . . . .	20	9	5	6	41	32	23
Rapid . . . .	20	9	5	6	49	39	23
W. A. C. . . .	20	8	7	5	42	37	23
Admira . . . .	20	8	6	6	39	30	22
Wacker . . . .	20	6	8	6	34	36	20
Simmering . . .	20	7	4	9	43	44	18
Sportklub . . .	20	6	5	9	32	35	17
Slovan . . . .	20	5	7	8	31	42	17
Rudolfshügel .	20	2	3	15	21	58	7

資料1 1924/25 年シーズンの最終結果

注：優勝シーズンの試合数は20、ハコアの成績は10勝4敗6分けて勝ち点は26である。

出典：Illustriertes Sportblatt, Jg.21, Nr.27, 4.Juli 1925, S.4

## (2) ハコアをとりまく反ユダヤ主義

すでに述べたように、1920年代におけるハコア・サッカー部門の発展と活躍はめざましいものであった。しかしこの時期のハコアの日常活動が常に順調であった訳ではない。チームカラーである青と白のユニホームの左胸にシオニズムの象徴である「ダヴィデの星」のエンブレムを誇らしげに貼り付けたハコアの選手に対しては、当然のように、対戦チームの選手や観衆から容赦ない反ユダヤ主義の洗礼が浴びせられた。競技場では常に反ユダヤ主義的で下劣な罵声が相手方の観衆から投げかけられ（ユダヤを豚に例える反ユダヤ主義の常套句：筆者補）、時にはハコアの選手や指導部に対する直接的な身体的危機を伴う妨害活動も多々あった。そうした身体的危機を伴う反ユダヤ主義事件の代表が1920年8月のドイツにおける「ケムニッツ事件」である。パールはこの事件の概要を次のように回顧している。

「ウィーンのハコアが1920年の2部リーグ優勝後ドイツへ遠征旅行に出発した時、ケムニッツでの試合でチームが反ユダヤ主義の波にぶつかるとは誰も思っていないかった。我々の2試合目となった当地ケムニッツでは試

合開始直後から観衆の敵対的態度がはっきりと目に付いた。その試合はホームチームのイレブンによって極めて激しく進められた。主審といえ最悪のラフプレーに際しても介入することを避けていた。我々は1点差のリードを保ち、試合も終盤にさしかかっていた。と、ケムニッツのセンターフォワードの選手がハコアの中盤の選手グリーンフェルト (Grünfeld) の胸に片足を伸ばしたまま飛びかかったのだ。限らないラフプレーに飽き飽きしていたグリーンフェルトはその足を両手で掴み上に向かって持ち上げたところ、攻撃者は後方にひっくり返ってしまったのだ。これが主審に試合を中止させる笛を吹かせることになったのだが、主審は激しい身振りを交えながら観衆にピッチ上に乱入するように求め、さらに『奴らを打ち殺せ』と叫び、自らは逃げ出してしまった。』<sup>7)</sup>

敵意に満ちた群衆が取り巻く中、突如として危険な状況内に放り出されてしまったハコアの選手たちは、結局、競技場の更衣室に逃げ込むことになった。危機的状況の中、最後の瞬間に救助に駆けつけたのがケムニッツの労働者スポーツクラブ (Arbeitersportklub) の選手たちであった。彼らは「ウィーンの諸君出て来い、労働者スポーツ団の同志たちが君たちを助ける！」という勇ましい言葉を述べたとも言われている。バルは主審を告発したが、男はバルの告発内容のすべてに反論し言い訳に次ぐ言い訳を並べ立てたため、警察は徹底的な調査を行うことにした。しかしながら、これ以上ケムニッツにとどまりたくはなかったバルが最終的に自分の告発を取り下げたため、主審は何のともめも受けずにすむことになった、というのが事の顛末である<sup>8)</sup>。

### (3) イングランドのハコアに対する紳士的評価

もちろんこうした反ユダヤ主義に根ざしたバッシングが多発する一方で、ハコアに対してフェアな態度で接するチームも数多くはなかったものの、確かに存在するには存在した。1923年9月、ロンドンの強豪ウエストハム・ユナイテッド (Westham United) との間で行われた親善試合(当日の観客数 15,000人<sup>9)</sup>)

は、欧州大陸のチームがイングランドの地で初めて勝利をおさめた歴史的な試合となった(5:0でハコアの勝利:筆者補)が、試合後、ハコアはこの勝利に感嘆したイングランドのメディアや観衆たちから高い賞賛を浴びたのである。以下、バールの記述を紹介してみよう。

「ゲームセットの笛が鳴り響いた時、数百の観衆がピッチ上になだれ込み、ハコアの選手たちを肩車に担いで試合場から連れ去った。観衆とともにイングランド・サッカー協会の事務局長であった老齢のウォール氏(Mr. Wall)もピッチ上に足を踏み入れ、われわれに対して輝かしい勝利を祝福した。試合場を離れる際には、新聞売りの少年たちが試合報道を手にして走り回っていた。われわれときたら大混乱のなかで全くのところ、自分たちがどんなにセンセーショナルな成功を収めたのかをよく理解していなかったのだ。ようやく夜になってウィーンからの祝電の数々、とくに連邦大統領のハイニシュ(M. Hainish)、ウィーン市、オーストリア・スポーツ連盟からの祝電が届き、夜中にウィーンからの電話で勝利を伝える号外が発行されたことを知って、われわれはようやくハコアがオーストリアのスポーツに再び先駆けとなる偉業を達成したことを理解したのだった。」<sup>10)</sup>

さらにバールによれば、ウィーンへの凱旋後、駅では盛大な勝利の出迎え式が開催され(鉄道楽団がハコアの歴史的偉業を勝利の行進曲で歓迎した)、国や市、そしてスポーツ組織の代表からの祝辞が相次いで伝えられたとされる。さらに駅からクラブ本部まで、ハコアの選手を乗せた車列が通過する街路は熱狂的なスポーツ・ファンによって完全に占拠されていたとも述べられている<sup>11)</sup>。文字通りウィーンの官民あげての熱狂的な出迎えぶりであった。

ここにひとつの興味深い新聞報道がある。それはイングランドの新聞『デイリー・メール(Daily Mail)』紙の報道である。同紙はこのセンセーショナルな試合経過を忠実に報道したうえで、ハコアがイングランドで実践したサッカーを「科学的サッカー」と評したのである。同紙によれば、ハコアはイング

ランドで通常多用される「キック・アンド・ラッシュ (Kick and Rush)」戦法は採用せず、力強い走力を交えた完璧なコンビネーション・サッカーを採用したと報道した。つまり同紙によれば、ハコア戦術はユダヤのクラブが作り上げたいわばサッカーの「ウィーン学派」であり、これがハコアの成功のコンセプトとされた<sup>12)</sup>。極めてフェアで紳士的な評価であった。

#### (4) ハコアの組織的特色

さて、1920年代中頃になり、その名前も世間に知られるようになったハコアの組織的規模はいかほどであったのか。

具体的なウィーンの手コアの構成員数についてはよく判っていない。とは言え、ハコアは1909年のクラブ結成後、数年間のうちに1,500人を超える会員と多くのファンを集めることに成功していたとされる<sup>13)</sup>。ただし、そこで正会員(つまり競技者:筆者補)と認められるのはユダヤ教徒の男女に限られ、非ユダヤ会員はトレーナーとしてのみハコアでの活動が許諾されていた<sup>14)</sup>。

また、時代は多少異なるが、1936年6月の統計によれば、最大規模を誇るウィーンの手コアの会員数は1,568人で、内訳はスポーツクラブ・ハコア(Sportklub Hakoah)に780名、水泳クラブ・ハコア(Schwimmklub Hakoah)に605名、ツーリズムクラブ・ハコア(Touristikkklub Hakoah)に183名であった。ちなみに、女性メンバーは総数中509名(32%)であった。ウィーンに次ぐ規模を保持していたのがシュタイアーマルク州の州都グラーツの手コアで、同じ統計資料からは1936年6月時点で291名の構成員を抱えていたことが判る(内、女性86名)<sup>15)</sup>。

初期の手コアにとって、会員の確保はクラブの生死を分かちかねない極めて重要な案件であった。というのも、手コアの運営費用の大半は会員が支払う年会費によって賄われていたからであった。1926年3月に発行された手コア・グラーツの機関紙によれば、1926年の会費は成人24シリング、生徒(徒弟)9.60シリングに定められていた(因みに手元にある1926年の人気週刊スポーツ新聞一部の値段は40グロッシェン=0.4シリングであり、これは成人会員

の年会費が同新聞の 60 部に相当することを意味している：筆者補）。会員は会費を会計宛に払い込み、新しい会員証を受け取ることを、この機関紙は丁重に求めている。見返りに、会員証を所有している正会員は、ハコアが主催者となる地区の競技大会に無料で入場できることも記されていた<sup>16)</sup>。

ハコアの名声が次第に高まるにつれ、指導部によって年会費以外の新たな資金獲得が模索されることになった。シーズンオフを利用して欧州各国やパレスチナ、新大陸アメリカなどで開催された親善試合による臨時の入場料収入である。たしかに先にみたドイツのケムニッツでの騒乱のごとく、ハコア絡みの試合は時に当地の激しい反ユダヤ主義の容赦ない洗礼に晒されることも多かったが、資金の安定的確保の他、ハコアの理念とその実践の披露の場としてもこうした機会は極めて有効であり、指導部もそうした副次的効果を十分に意識していた。例えば、1925 年夏に行われたポーランド、エストニア、ラトビア遠征の成果を報告する記述の中でバールは、これらの諸国においてハコアの登場が持つプロパガンダ的価値の重要性を指摘したうえで、ハコアの選手たちが今回も彼らの「ミッションを果たした」ことを誇らしげに記している<sup>17)</sup>。

こうした指導部の思惑は見事にあたり、ハコアが訪れる先々は、有名なユダヤクラブを一目みたいと願う当地のユダヤ系のファンで常に溢れかえっていた。近年公刊された先のゲットマンの伝記本の中には、ハコアが初めてタイトルを取った 1924/25 年以降、このチームの人气がすさまじかったことを物語るエピソードがいくつも紹介されている。そのひとつとして後年南アフリカのジャーナリスト兼作家として名を成すアルトゥール・マルコヴィッツ (Arthur Markowitz) の経験を紹介してみよう。

1960 年代初頭に公刊されたユダヤ・スポーツ本のためにインタビューを受けた時に語られた内容によれば、彼は 10 歳か 11 歳の頃（おそらく上に紹介した 1925 年夏か翌 26 年夏のいずれかと推測される：筆者補）、ハコアの遠征試合を観戦するために、ラトヴィアのミタウ (Mitau 現イェルガヴァ Jelgava：筆者補) から首都のリガ (Riga) までおよそ 50 キロメートル近い道のりを、友人たちと連れだって自転車で夜通し駆け抜けたとされる<sup>18)</sup>。徹夜でこの距離



を走行することは大人にとっても大変な苦行である。まさに異国のユダヤ少年たちのハコアへの熱い思いが伝わるエピソードである。

もうひとつのエピソードはあまりに有名である。ハコアが1926年5月初旬にニューヨークで当地の人気プロ・サッカーチーム、ニューヨーク・ジャイアンツ（New York Giants）と親善試合を行った際、ニューヨークのポロ・グラウンド（Polo Grounds）に押し寄せた観衆の数は実に46,000人を数えている。これはアメリカ合衆国のサッカー競技が動員した観客数としては、その後40年間破られることのない新記録となった<sup>19)</sup>。

以上のエピソードが如実に物語るように、この当時のハコアは押しも押されもせぬ、世界で最も人気のあるサッカーチームのひとつとなっていたのである。

- 1) Roman Horak, „Vereinsanhänger und Fussballkonsumenten. Ein Sport – Zwei Welten“, in: Jüdisches Museum der Stadt Wien (Hrsg.), *a.a.O.*, S.35
- 2) H.H.Glanz(ed.), *35 Years of the Hakoah A.C. , Jubilee Book*, New York 1945, p.13
- 3) *Wiener Sport=Tagblatt*, Nr. 575, 3. Jg., Wien, 16. November 1920, S.1
- 4) Horak, *a.a.O.*, S.35
- 5) ベーラ・グットマンは1899年1月27日にハンガリーで生まれ、1981年8月28日にウィーンで没している。彼は第2次世界大戦後、欧州や南米の有名クラブ・チームの監督を歴任した他、ハンガリー、ポルトガル、オーストリアの代表監督としても腕を振るった経験をもつ。監督としての特筆すべき業績に、1960/61年、1961/62年シーズンの「UEFA ヨーロピアン・カップ・チャンピオン（現 UEFA チャンピオンズリーグ）」連覇がある。彼のチーム、ベンフィカ・リスボン（Benfica Lissabon）の決勝戦の相手はそれぞれFC バルセロナ（FC Barcelona）とレアル・マドリード（Real Madrid）であった。R. Keifu, *Die Trainerlegende. Auf den Spuren Béla Guttmanns*, Kassel 2001, S.6, S.20ff 参照。
- 6) Haber, *a.a.O.*, S.26
- 7) Arthur Baar, „Wiener heraus, die Arbeitersportler schützen euch!“, in: Jüdisches Museum der Stadt Wien (Hrsg.), *a.a.O.*, S.62
- 8) Schwaiger, *a.a.O.*, S.36.; Ulrike Maria Gschwandtner, *Jüdischer Sport in einer antisemitischen Umwelt. Kontinuitäten antisemitischer Verhaltensmuster im österreichischen Sport des 20. Jahrhunderts exemplarisch behandelt am Beispiel des jüdischen Sportklubs „Hakoah“*, (Diplomarbeit), Salzburg 1989, S.21
- 9) Arthur Baar, „S.C. Hakoah - Westham United (London) 5 : 0“, in: SC Hakoah (Hrsg.), *45 Jahre S.C. Hakoah Wien*, S.15
- 10) Ebenda
- 11) Ebenda, S.16

- 12) Bunzl, *a.a.O.*, S.70f; Schwaiger, *a.a.O.*, S.24 「ハコアの試合場でのプレースタイルは、カール＝ハイント・シュヴィント (Karl-Heinz Schwind) によって『見事に混合されたオーストリア的・ハンガリーのユダヤ的なサッカー・ミルクコーヒー (vollpaprifizierte<sup>(sic)</sup> österreichisch-ungarisch-jüdische Fußballmélange)』と的確に形容された。優勝した年のチームでは、ベーラ・グットマンのかたわらで、ブダペストでサッカーを習得した5人のユダヤ選手がプレイしていた。(…)。スコットランド流のパス3角形、つまり2-3-5システムにおいて、グットマンは中盤の選手として中央のポジションを担っていた。(…)。試合場で彼はゲームのオーガナイザーとして鍵となる機能を果たしていた。」 Claussen, *a.a.O.*, S.33
- 13) Bunzl, *a.a.O.*, S.24 ウィーンのコアの例に倣って各地のユダヤ・コミュニティにも類似の組織が成立した。1919年にはシュタイアーマルク州の州都グラーツに会員400人を抱えるコアが創設された。その後、シュタイアーマルク州のレオーベン(1926年)、上オーストリア州の州都リンツ、ティロールの州都インスブルックにも相次いでコアの名称を冠するスポーツ組織が誕生した。Schwaiger, *a.a.O.*, S.15
- 14) Gschwandtner, *a.a.O.*, S.19
- 15) Bunzl, *a.a.O.*, S.110
- 16) *Hakoah. Offizielles Organ des Sportklub „Hakoah“*, Graz, 1.Jahrgang, Nr.1, Graz, im März 1926, S.1
- 17) Arthur Baar, „Unsere große Sommerreise“, in: *Hakoah. Offizielles Organ des Sportklubs Hakoah*, Wien, 1. Jg., Nr.1, 14. August 1925, S.4 なお、1925年夏のこの遠征期間中、地元のチームとコアの間で興業試合が計15試合行われたが、コアは全試合で89ゴールを決め成績は15勝0敗であった。当時の記録を見る限りリガでは3試合が行われている(7月26日、28日、30日)。*Hakoah. Offizielles Organ des Sportklubs Hakoah*, Wien, 1. Jg., Nr.1, 14. August 1925, S.6 なお、翌26年夏にはポーランドとラトビア遠征が行われ、グットマンもコアでの選手としての最後の義務を果たしている。Claussen, *a.a.O.*, S.49 グットマンを帯同して実施された1926年夏の遠征(ポーランドのKattowitz、ラトビアのRigaおよびReval)での試合については以下を参照。*Illustriertes Sportblatt*, Jg.22, Nr.31, Wien, 31. Juli 1926, S.3; Nr.32, Wien, 7. August, S.2; Nr.33, Wien, 14. August, S.2
- 18) Bolchover, *a.a.O.*, S.35f
- 19) Keifu, *a.a.O.*, S.13f ニューヨーク・ジャイアンツの所有者はユダヤでベルギー系のMaurice Vandewegheであった。ebenda, S.15

#### 4. ハコア人気の原因に関する仮説的考察

##### (1) ハコア?あるいは他の選択肢?

1920年代にコアがあまたのユダヤの観衆を競技場に動員することができ

たのは何故か。ここでは、ハコア会員当事者の回顧録を手掛かりにしつつ、この問いかけに対する筆者の答えを仮説的に提示してみたい。また、あわせてドイツの類似事例の紹介も行ってみたい。

ハコア人気を考えるうえでまず指摘すべきは、この団体が当時の人気スポーツであるサッカーの楽しさを会員間で共有する集いの場であったとする考えである。前述したように、スポーツ競技団体としてのハコアの特徴は、1909年の成立当初から、人気スポーツのサッカーを基盤に発展した点にあった。つまり、純粋にサッカーを実践する機会を提供してくれる場としてハコアを選んだユダヤの若者は少なくはなかったと思われる（プロ選手のケースについては以下で論じる）。

しかしながら、ユダヤの若者がサッカーを実践することはハコア以外でも可能であった。例えば、ハコア・サッカー部の強力なライバル団体であった「アマチュア (Amateure 1926年にFußballklub Austriaに改称：筆者補)」はドイツ系競技者に加えて裕福なユダヤ教徒を多く結集する混成クラブであった（構成員の社会的構成に関するこうした傾向は、「貧しいユダヤ」がクラブ内に多かったとされるハコアとは大きく異なる特性である）<sup>1)</sup>。元オーストリア代表チームの監督をつとめたこともある「アマチュア」関係者の記憶をもとに、当時の「アマチュア」トップチームの主力イレブンの構成を紹介すると、ドイツ系とユダヤ系競技者の比率は「フィフティ＝フィフティ」だったようである（5人のユダヤ教徒と6人のキリスト教徒）<sup>2)</sup>。このように「アマチュア」は構成員内に非ユダヤ競技者も多く含んでいた点で、ユダヤ教徒だけで構成されるハコアとはいささかその性格を異にしていた。とは言え、「アマチュア」はウィーンでは高い人気を誇る強豪チームであり、ユダヤ教徒であってもハコアではなく「アマチュア」に競技者として参加することも、このチームを自分のご最良チームにすることも可能であった。

その他、ウィーンのユダヤ教徒が関心を持つ可能性のあるチームとして、ハコア以外の純正ユダヤのサッカーチームも存在した。1924/25年シーズンのウィーン・リーグのプロ化以降、財政的困難により活動を休止するクラブも多

くなったが、それでも 1925 年の時点でウィーンにはハコアの他に 10 に及ぶ純正ユダヤ・サッカーチームが存在し、そこに結集していたサッカー選手は実に 1,800 人を数えていた<sup>3)</sup>。

つまり以上から明らかなように、ユダヤの競技者やユダヤのサッカーファンにとってはハコアが唯一の選択肢ではなかった訳である。では何が彼らにハコアを選択せしめたのか。

## (2) ハコア＝「ユダヤ・シェルター」理論

ここではウィーン生まれのユダヤ作家フリードリヒ・トアベルク (Friedrich Torberg)<sup>4)</sup> の回想録を参考にしつつ、ユダヤの若者がハコアを強く意識した原因に迫ってみよう。

少々長い引用となるが、若き日のトアベルクが抱いていたかくも強き「ハコア愛」の核心部分を以下に紹介する。

「私は成長して 10 歳になった時にハコアのファンになった。このことが後の人生にどんな大きな影響を与えたかについては分からない。私のユダヤとしての立場にそれは影響を与えただけではなく、決定した。私はハコアの数々の勝利の生き証人として成長し、ハコアとともに大人になるという計り知れない幸運を得た。私は一度も、一秒たりとも、自分がユダヤであることを『恥じ』なくても良いという計り知れない幸運を得た。一体何に対して恥じるべきなのか？ 他の人々よりも、ユダヤがより多くのゴールを決め、より速く泳ぎ、より巧みにボクシングをすることに対してか？ すべてを理解し始めた時、私はまだ子供であった。子供の頃から、私はユダヤであることに誇りを抱いていた。そしてこの世で何物にも換え難いこの誇りは、いつの時もハコアの名前と結びついていて。私は 13 歳になり、ようやくハコアの会員になることができるようになった。それまでは、私の両親は激しくそれに反対した。私がスポーツをやりたいと願う気持ち以上に激しく。両親はそれらすべてを適切なこととは見ていなかった。良家

の出で、しつけの良い子は、W.A.C. でテニスをしなければならないのであって、ハコアでサッカーなどしてはいけなかったのだ。しかし、両親が Bar Mizwah (Mizwa とも記す。ユダヤ男子が13歳で迎える宗教的成人式：筆者補) に何が欲しいかと訊ねた時、私はとっさに『ハコアに加入したい』と答えた。そして、両親はそれがダメとは言えなかったのだ。』<sup>5)</sup>

ハコア入団に際して、まずは何をおいても大好きなサッカー部門を希望したトアベルクであったが、1921 年当時、スポーツに熱狂した若者が殺到した人気の同部門からは加入を拒否され、結局、水泳部門の所属となった<sup>6)</sup>。

上記のトアベルクの独白が示すのは、ハコアを選択する決断の背景には、ハコアを単なるスポーツのパフォーマンスの場としてみなす以上に、積極的な意義付けがあったということである。それはなにをおいてもハコアのチームとしての強さであった。ハコアは、日々の反ユダヤ主義に苛まれる当時のユダヤ青少年にとっては、その誇らしい実績によって、自らを反ユダヤ主義の呪縛から解放し、ユダヤとしての誇りを再確認させてくれる存在であった。

この点は、ドイツのユダヤ・スポーツクラブについての調査を行った研究の中でも指摘されている。これはナチ時代を対象にしている点において、考察時期は異なっているものの、それでも上述の記述と類似したユダヤ住民の特殊な心理構造が明らかにされている。

「まさにスポーツが、差別と迫害そして権利剥奪の時代においてユダヤ住民の生活の中でかくも大きな意義を持っていたことは、今日の視点からはとにかく不思議なことである。当時の時代の生き証人の記憶は、とりわけ次のふたつの結論を可能とする。ひとつは、スポーツの場がある種のシェルターとなったことである。そこでは、選手と観客は日常の心配事を数時間の間は忘れることができた。もうひとつは、スポーツがナチ時代のユダヤの人々にとっては、自分自身に対する価値感と自覚を強化し維持するための、ほぼ唯一無二の可能性を提供していたことである。ナチによっ

て肉体的に退化した劣等なものと烙印を押されていたため、ユダヤの人々は自分たちがどんな成績をあげることが可能なのかを、スポーツを通じて自らにそして回りの世界に実演してみせることができた。こうした方法で、スポーツはナチの人種政策に対する対抗手段のひとつの形となった。』<sup>7)</sup>

ここで述べられているように、スポーツの場を一種のユダヤのシェルターとして見る捉え方は、激しい反ユダヤ主義に晒されていたウィーンのユダヤ社会におけるハコア人気を理解するための有効な鍵となろう。

### (3) (補論)「ハコア＝シェルター理論」の補強のために

ハコアをユダヤのシェルターとみなす視点を補強してくれるのが、1904年に創設され1930年代に黄金期(30年代に4回ドイツ・チャンピオンのタイトルを獲得:筆者補)を迎えたドイツ・ルール工業地帯の人気チーム、シャルケ04(FC Schalke 04)に関するゲーアマン(S. Gehrmann)の研究である<sup>8)</sup>。多少の飛躍を恐れずにこの研究の骨子を述べれば、シャルケ04というチームの特徴を際立たせたものは、何をおいても当時の選手の中にマズール人<sup>9)</sup>子弟が多かったことである。シャルケ04が成立したのはドイツ西部の工業都市ゲルゼンキルヘンのシャルケ地区で、この地域はスラブ系のマズール人が集住する炭鉱地帯であった。彼らの多くは19世紀後半のドイツ工業化進展の時代に、故郷のポーゼン地方(Pozen)から炭鉱労働者としてこの地に移り住んだ人々とその家族たちであった。そしてシャルケ04が抱えるこの特性こそが、この地におけるこのチームの人気を不動のものにしたのである。

ゲーアマンの結論を先取りして示せば、プロテスタント教徒を多く抱えるマズール人は、本来、カトリック系のポーランド人とは宗教、言語、ドイツ帝国への同化志向などにおいて異なっていたにもかかわらず、ルール地方のドイツ系住民はマズール人をポーランド人とみなし同等に差別したことになる。と同時に、彼らはドイツ社会においては、裕福な市民からは常に社会的に最下層に

属す労働者階級としても差別された。つまり、下記の引用文に見るように、このエスニック的、社会経済的な2つの差別の構造が、ドイツ系のブルジョア市民チームに対して勝利を重ねるシャルケ04に対する、ルール工業地帯のスラブ系住民と、この地域に暮らす労働者階層全般の共感を高めた、と考えられる<sup>10)</sup>。ゲーアマンは述べる。

「こうした社会心理学的背景をみると、自分の隊列の中から出た団体が名声を博し、あらゆる人々の話題になるということがルール工業地帯の労働者にとってどんな意味を持ったかはよく理解できよう。ましてや、ブルジョアの起源をもつドイツサッカー連盟や、そのトップに君臨した団体が長きに渡って上品な市民階層によって支配されていたということを考えれば当然である。その成功の時代に、労働者階級の出自をつねにオープンにし、誇りにしたF.C. シャルケ04はルール地方の人々の共感を覚醒した。それは、人々がこの団体のなかに自らの行動能力と生活能力を見だし始めたからであった。『ポラッケン（Pollacken ポーランド人に対する差別的呼称：筆者補）として、またプロレタリアートとして』社会の中の分類化に苦しんできた者の多くは、自分たちが属した世界から出てきた団体に心から熱狂しつつ自らを重ね合わせた。それはこの団体が、自分たちの成功への欲求や名声を叶え、さらにそうすることによって社会的な尊敬や認知というものを具現化してくれたからだだった。』<sup>11)</sup>

ここで指摘された社会心理学的な要因は、オーストリアにおけるハコアの成功の理由を理解する際にも重要となる。つまり、ハコアのファンに多かったユダヤ市民は、当時のオーストリア社会の中では他のグループからは完全な差別の対象とされていた。純粋なユダヤのチームが、ドイツ系のチームを体力面、技術面で凌駕するのを初めて間近に体験したユダヤ市民がこうした快挙に快哉を叫ぶのも不思議ではない。いわばハコアはウィーンのそして世界のユダヤにとっては、自分たちの日頃の溜飲を下げてくれる一種の「精神的シェルター」

としての機能を持っていたのである。

#### (4) ベーラ・グットマンに代表されるユダヤのプロ選手の意識

一方、グットマンに代表されるハコアのプロ・サッカー選手<sup>12)</sup> たちにとって、この団体はいかなる意味を持っていたのだろうか。ここではこの点を、グットマンのサッカー選手としての生い立ちを見ながら考察してみよう。

本稿でも度々登場するユダヤ選手ベーラ・グットマンは、1899年1月27日にハンガリーの首都ブダペストで生まれている。両親は現在のウクライナ領に含まれるハンガリー北東部の二つの小村の出身であった。ブダペストで両親はダンススクールを開設していたこともあり、グットマン自身も16歳の時にダンス・インストラクターの資格を獲得していた。1901年にサッカーリーグが創設されると、ハンガリーでもサッカー人気に火がつくことになった。グットマンは1917年に18歳でブダペストのチーム(Törekvés)に参加して中心選手として活躍し、1918年のハンガリー一部リーグにおいてチームも3位という好成績を残している。こうして1920年春の時点までにグットマンは他のクラブのスカウトたちの目を引く存在となり、同じ年にブダペストのユダヤの強豪チーム、MTKブダペスト(MTK Budapest)に移籍した<sup>13)</sup>。

しかしながら、グットマンのハンガリーにおける順調なサッカーキャリアは、次のふたつの出来事によって阻害される。一つは当時のハンガリーの政治社会情勢である。グットマンがハンガリーでプレイしていた頃は、革命の結果1919年3月に成立した共産主義者クン・ベーラ(Kun Béla)のハンガリー・ソビエト共和国政権が崩壊(1919年8月)した直後の時期にあたり、当地では反革命義勇軍(Freikorps)による過激な白色テロが真っ盛りであった。政権指導者クン・ベーラがユダヤの混血であったこともあり、もともと反ユダヤ主義が強かったハンガリーではユダヤ住民に対する見境のないテロ行為(ポグロム)が横行し、多くのユダヤ住民の命が奪われることになった。たしかにグットマンたちはユダヤ選手として、敵選手や敵チームのファンたちによる反ユダヤ主義への対応方法は熟知していたと思われるが、さすがにハンガリー



の白色テロ時代（1919-21年）の対ユダヤ迫害は我々の想像の域を超越しているようである。この時期、ハンガリーで白色テロの犠牲者（＝死者）となった者は3,000名を数えたが、その半数はユダヤ住民であったとされる<sup>14)</sup>。こうした政情不安と当地の度を越えた反ユダヤ主義に対する恐怖が、グットマンをはじめ多くのユダヤ選手のウィーン移住に大きな影響を与えたことは確かである<sup>15)</sup>。

かかる政治社会状況の下、グットマンのハコア移籍を後押しする出来事が発生した。彼が1920年以降所属したブダペストのユダヤ名門チーム MTK で、1921/22年シーズンの途中に発覚した複数の選手に対する不正な報酬支払い事件である。グットマン自身はこの事件とは無関係であったとされるが、当時はまだアマチュアリズムが全盛であったハンガリーにおいて、こうした不正事件は容易にユダヤのチームに対する世間の反ユダヤ主義的言動や行為を助長することになる。これに巻き込まれることを恐れたグットマンは結局ブダペストを去り、ウィーンのハコアを「現実のシェルター」としたのであった<sup>16)</sup>。

ここで注目する必要があるのが上述した選手とその待遇の問題である。グットマンがウィーンに移ったのは1921年秋のことであり<sup>17)</sup>、これはウィーンにプロ・サッカーリーグが結成される3年前にあたる。当時のウィーンの一部リーグは「公式には」アマチュアリーグであり、選手は給与をクラブから支給されることはなかった。リーグに「アマチュア」という名称をもつ強豪チームが存在したのもそうした理由による。つまり、グットマンはこの時点では必ずしも高額な報酬目当てにハコアに移籍した訳ではないと言いたいところだが、彼がウィーン時代の最初の数年間の生活費を何によって確保していたのかについてはよく判っていない。ただし、サッカー選手であると同時にダンス・インストラクターの資格を持っていたグットマンは、ウィーン1区のヴィージンガー通りに開設されたダンス学校の経営に関与しており（図版2：機関紙『ハコア』1925年10月2日号に掲載された広告参照）、そこからの収益を生活の糧にしていたと推測できる<sup>18)</sup>。

とはいえ、ハコアには私財を提供する支援者が少なからず存在していたこと



### 図版2 「ヨーゼフ・エーリヒのダンス教室再開！」の広告

注：責任者（Leiter）にベーラ・グットマンの名前が記されている。広告には子供用・青少年用・個人指導が毎日実施される他、技術指導（Perfektion）が水曜、土曜、日曜の夜7時から11時まで開催されることが記されている（教室名のヨーゼフ・エーリヒは彼のビジネス・パートナーである。彼が事業から手を引いた後にグットマンがこの教室を旧名のまま再開し、独力で経営を継続した時の広告文である。グットマンはプロ選手となった1925年以前もダンス教室から報酬を得ていたと言われている。以上については Claussen, *a.a.O.*, S.28 を参照）。

出典：Hakoab. *Offizielles Organ des Sportklubs Hakoab*, Wien, Jg. 1, Nr. 8, 2. Oktober 1925, S.116 より

もあり<sup>19)</sup>、彼らから移籍に伴う契約一時金 (Handgeld) の他、生活費や報酬を密かに受給していた可能性も否定できない。つまり、グットマンがブダペスト時代にも体験したいいわゆる「見せかけのアマチュアリズム (Schein-Amateurismus)」問題は1924/25年にプロ選手制度が導入されるまで、たしかにウィーンにも存在していたのである<sup>20)</sup>。いずれにしてもこの「裏」の問題については、資料上の制約もあるため今後の検討に委ねたい。

- 1) カール・ガイヤー (Karl Geyer) の記憶によれば、「オーストリア (Austria)」とハコアの対戦時には必ずファン同士による言い争いが生じたとされる。裕福なユダヤのファンつまり実業家は「オーストリア」を応援し、一方、貧しいユダヤのファンはハコアを応援した。そして両グループは観客席上でいつも互いに「ユダヤの豚」と罵り合っていたとされる。Claussen, *a.a.O.*, S.36 トアベルクによればこのライバル同士の試合は、両チームのファンや指導部の特徴から「ユダヤ対イスラエル (Juden gegen Israeliten)」という符牒で呼ばれることが多かったとされる。前者が「オーストリア」を後者がシオニズム的要素を含むハコアを指しているのは言うまでもない。Friedrich Torberg, *Die Tante Jolesch oder Der Untergang des Abendlandes in Anekdoten und Die Erben der Tante Jolesch. Doppelband*, München 2013, S.506
- 2) Claussen, *a.a.O.*, S.36
- 3) Alexander Juraske, „Die jüdische Sportbewegung im Wien der Zwischenkriegszeit“, in: Bernhard Hachleitner, Matthias Marschik, Georg Spitaler (Hrsg.), *Sportfunktionäre und jüdische Differenz. Zwischen Anerkennung und Antisemitismus - Wien 1918*

- bis 1938, Berlin / Boston 2019, S. 81 例えば, „Kadimah“, „Hasmonea“, „Hechawer“ などである。Friedrich Torberg, „Warum ich stolz darauf bin“, in: Gisela Dachs u.a. (Hrsg.), *Sport. JÜDISCHER ALMANACH der Leo Beck Institute*, Berlin 1. Auflage, 2011, S.60
- 4) トアベルクの作家としての代表作には悩める生徒の自殺問題を扱った処女作 *Der Schüler Gerber*, Wien 1930 や若者とスポーツを題材にした *Die Mannschaft. Roman eines Sport-Lebens*, Wien 1935 などがある。彼はまたハンガリー出身のイスラエル作家エフライム・キシヨン (Ephraim Kishon) の作品の翻訳者としても著名であった。彼の伝記に以下がある。David Axmann, *Friedrich Torberg. Die Biographie*, München 2008
  - 5) Torberg, „Warum ich stolz darauf bin“, in: *a.a.O.*, S.59
  - 6) Ebenda, S.59f
  - 7) Lorenz Peiffer / Henry Wahlig, *Jüdische Fußballvereine im nationalsozialistischen Deutschland. Eine Spurensuche*, Göttingen 2015, S.28
  - 8) Siegfried Gehrman, „Der F.C. Schalke 04 – ein Verein und sein Nimbus“, in: Roman Horak / Wolfgang Reiter (Hrsg.), *Die Kanten des runden Leders. Beiträge zur europäischen Fußballkultur*, 1991 Wien, S.45–54
  - 9) 1912 年当時ドイツ西部のルール地方 (ヴェストファーレン、ラインラント州) に居住するポーランド人は 272,076 人、マズール人は 184,969 人であった。伊藤定良『異教と故郷——ドイツ帝国主義とルール・ポーランド人』東京大学出版会、1987 年、30 頁の表 3 より。伊藤の解説によればマズール人の定義は以下の如くである。「彼らの話すマズール語は、ポーランド語の一方言といわれるほどにポーランド語に近い。オストプロイセン南部に居住していた。中世末にポーランドのマゾフシェ地方から移住し、ドイツ騎士団やプロイセン公国に服属した。16 世紀にはプロテスタントに改宗し、ポーランド・カトリック社会からの分離を進めた。独自の言語と民族文化は維持されていたが、19 世紀初め以来ゆっくりとドイツ化傾向を見せるようになり、ドイツ統一後のゲルマン化政策の中で、ドイツ社会への同化が顕著になる。」伊藤、同上書、27 頁。
  - 10) Gehrman, *a.a.O.*, S.51f
  - 11) Ebenda, S.52
  - 12) 少々時代は異なるが 1937 年の新聞報道は、ウィーンのプロ・サッカー選手の 3 分の 2 は郊外区のフロリツドルフ (22 区) とファヴォリーテン (10 区) の出身であると算出している。つまりウィーンのプロ選手にはプロレタリア的出自を持つ者が極めて多かったと言える。Horak, *a.a.O.*, S.36
  - 13) Bolchover, *a.a.O.*, S.7ff
  - 14) Bela Bodo, „The White Terror in Hungary, 1919–21: The Social Worlds of Paramilitary Groups“, in: *Austrian History Yearbook*, Vol.42, April 2011, p.133
  - 15) Keifu, *a.a.O.*, S.11 ハコアが優勝したシーズンには、グットマン以外にも実に 5 名のブダペスト出身選手が在籍し、グットマンの脇を固めていたのである。Claussen, *a.a.O.*, S.33
  - 16) Bolchover, *a.a.O.*, S.21
  - 17) Keifu, *a.a.O.*, S.11
  - 18) Claussen, *a.a.O.*, S.28

- 19) 確定はできないが、ここで筆者がグットマンの支援者として想定している人物は例えばハコアの名誉会長のイグナツ・ケルナー (Ignaz Körner) である。詳細は Körner, *a.a.O.*, S.117ff を参照されたい。
- 20) Claussen, *a.a.O.*, S.30 当時の契約一時金にまつわる噂に関しては以下も参照。Matthias Marschick, *Massen, Mentalitäten, Männlichkeit. Fußballkulturen in Wien. Enzyklopädie des Wiener Wissens. Band I: Fußball*, Wien 2002, S.64

## 5. むすびにかえて：ハコアとシオニズム

本稿が扱ったウィーンのコアというユダヤ・スポーツ競技団体は、その指導部にとってはシオニズムを実現するために必要となる新規団員の確保にとっては重要な存在であった。とくにそのサッカー部門は、人気選手を多く抱えていたことや、またその輝かしい数々の成功によって、コア理念を実現してみせる「広告塔」そのものであった。

また、コア・サッカーの熱狂的なファンにとっては、このクラブは彼らの「精神的なシェルター」として重要な役割を果たしていた。第1次世界大戦後も依然として続く反ユダヤ主義的な環境の中で、非ユダヤ住民から侮蔑されつつ暮らすことを余儀なくされたユダヤ住民にとっては、コアの輝かしい勝利の数々は彼らの日頃の強い鬱憤を晴らすことに大きく貢献した。

一方、本稿で詳しく紹介したベラ・グットマンのケースが如実に物語っているように、コアのプロ選手たちにとって、コアとは「現実のシェルター」そのものであった。ブダペストの反ユダヤ主義を逃れてウィーンに來住したグットマンをはじめとするハンガリー出身のユダヤ選手たちは、コアを通じて身の安全を確保することができたし、プロ化が始まった1924/25年シーズンからは、「見せかけのアマチュアリズム」と批判されることもなく、堂々とこのチームから生活の糧を得ることができた。

ただし、この1924/25年シーズンから始まった大幅な選手身分制度改革は、選手たちの生活環境とその意識変化に大きな影響を与え、コアの安定的な運営にとっては重大な負の副作用をもたらすことにもなった。

ウィーン1部リーグで初優勝をとげた翌年の1926年に初めて実現したアメリカ遠征後、当地の複数のプロ・サッカークラブから高額の手給を提示された主力選手たちは相次いでウィーンを離れ、アメリカに向うことになった<sup>1)</sup>。もちろん、移籍の理由には好条件の手給の他、当時175万のユダヤ教徒<sup>2)</sup>が居住していたニューヨークの居心地がハコアの選手には良かったことも考えられるが、少なくともこの移籍に際してグットマンに提示された受け入れ先のクラブからの条件が破格であったことは間違いない。一説によると、ニューヨーク・ジャイアンツが彼に提示した具体的な手給額はウィーン時代を「数倍上回る」<sup>3)</sup>、月給350ドル、支度金500ドルで、あわせてこの時の契約条項にはアメリカにおける副業の許可も含まれていた<sup>4)</sup>。このことから当時の新聞には、ハコアの選手たちが明らかに「ドルの害毒」に毒されたと揶揄する記述もみられる<sup>5)</sup>。

この1926年の選手の大量脱退がハコアの大幅な戦力の弱体化を招き、その後の没落、つまりは1927/28年シーズンの2部リーグへの降格につながる直接の原因となったことについては疑いの余地はない。またこの一連の騒動が、ユダヤの力を誇示するハコアの強さに憧れていたウィーンと世界各地のハコア・ファンを大きく失望させたであろうことは十分に考えられる（翌年の観客数は事実激減した：注6を参照）。と同時に、この有力選手の大量離脱事件は、サッカー部門をハコア理念普及のための重要な「広告塔」として考えていた当時の指導部にとっても大打撃となった<sup>6)</sup>。グットマンは確かに生涯を通じてユダヤであるがゆえに受ける差別の中で、ユダヤとしての自意識は保ち続けてはいたが、彼自身は決してパレスチナにユダヤの新天地を求めるシオニストではなかった。彼が終生愛して止まなかったのは、ウィーンのカフェとそこで交わされる粋な会話（Schmäh）だったとされる<sup>7)</sup>。このグットマンの例に見るように、ハコアのプロ選手の中には本来の意味でのシオニストは存在していなかった。ファンもハコアの勝利に酔いしれたものの、その勝利の先にシオニズムの実現を期待してはいなかった。それはまだこの時代が平和の時代、いわゆる「欧州における相対的安定期」であったことも大きく関係していよう。

その後 1930 年代に入ると、台頭するナチの危険性に気づき始めた欧州ユダヤ社会のパレスチナに対する関心は急速に高まっていく。例えば、1933 年 1 月 30 日のヒトラー政権成立以降、パレスチナへの欧州からのユダヤ移住者数はそれ以前の時期と較べてもあきらかに激増しているが、これも欧州ユダヤ社会のナチ政権に対する危機意識の顕れであろう<sup>8)</sup>。こうした欧州ユダヤ社会を取り巻く状況の急激な変化に伴い、ウィーンをはじめ世界各地に存在していたハコアも本来のスポーツ団体としての基本的性格は維持しつつも、その活動目的と活動内容を変化させていったと思われるが、ナチ政権成立とそれ以降のハコアの展開については別の機会にあらためて検証することとする。

- 1) ハコアからはグットマンの他、Grünwald, Schwarz, Häusler がニューヨーク・ジャイアンツに、同じくブルックリン・ワンダラーズ (Brooklyn Wanderers) には Neufeld, Schönfeld, Eisenhoffer, Drucker, Kalmann Konrad が移籍した。Adolf Biheller, „Fußball in Amerika“, in: *Illustriertes Sportblatt*, Nr. 36, 4. September 1926, S.5
- 2) またその 9 割は東欧からの移民あるいは移民の子女であったとされる。Bolchover, *a.a.O.*, S.48
- 3) Keifu, *a.a.O.*, S.14 ちなみにベーラ・グットマンがプロ選手となった 1924/25 年シーズンのウィーンでの報酬は 1,000 万クローネ (1,000 シリング: 筆者補) であったと言われている。確かにグットマンのような花形選手も存在したが、1920 年代中頃の平均的なプロ選手は専門職の労働者 (Facharbeiter) 以上の稼ぎを得ることはなかった。1 部から 3 部まで、全部で 3 つ存在したウィーンのプロ・サッカーリーグ選手の大半は、どうやらギリギリの生活費で暮らしていたようである。つまり、当時のウィーンのような大都市ですら、300 人を超えるプロ選手を養うことはできなかったのである。なんとか十分な生活をおくれたのはウィーンの 4 大クラブ、つまり「アマチュア (Amateure)」、「ヴィエンナ (Vienna)」、「ラピッド (Rapid)」そして本稿の対象であるハコアの選手たちだけだった。それでも、こうしたトップチームに所属する平均的な選手たちのサラリーは、グットマンが要求する額にははるかに及ばなかったのである。Claussen, *a.a.O.*, S.34f この時のグットマンの年収はハコアのシーズン予算の実に 4 分の 1 を占めていた。Keifu, *a.a.O.*, S.12
- 4) Claussen, *a.a.O.*, S.49 月額 350 ドルは年収換算で 4,200 ドルを意味するが、これは当時のアメリカ合衆国の平均的な民間企業労働者の年収のおよそ 3 倍にあたった。Bolchover, *a.a.O.*, S.48 なお、当時 27 歳のグットマンがニューヨークでデビューしたのは 1926 年 9 月 22 日であった。Keifu, *a.a.O.*, S.15
- 5) „Das Gift des Dollars. Ein Blick hinter die Kulissen des Wiener Fußballtheaters“, in: *Illustriertes Sportblatt*, Nr. 40, 2. Oktober 1926, S.7 グットマンは 1929 年にジャイアンツを退団するまでアメリカでは 89 試合の公式戦に登場した。Keifu, *a.a.O.*, S.15 その後、彼は他のニューヨークの複数チームに移籍し、1932 年にサッカー選手と

してのキャリアを終えるまでジャイアンツ時代を含め、アメリカでは公式戦計 193 試合を経験した。Claussen, *a.a.O.*, S.55

- 6) バールの回顧録によれば、真相は以下のごとくとなる。アメリカツアーに参加した選手たちは全員、一旦ウィーンに帰還した。帰国後、選手の多くが指導部にアメリカへの自由移籍 (Freigabe) を懇願したため、指導部は数時間の議論の後、希望する全選手を無条件で移籍させる決定をした。その理由は、所属チームが許可した無条件移籍以外に選手たちはアメリカでプレイすることはできなかったためである (アメリカサッカー連盟もオーストリアと同じく FIFA に加盟)。また、選手の移籍に関しては、当時からすでに移籍金 (Ablösegeld) 制度も存在していたが、ハコアの指導部はこの時相手チームにその支払いを要求していない。当時、ハコアが国内リーグ制覇を含め、すでに多くを達成したという充足感のせいか、指導部は各選手のその後の人生の踏み台となると確信していたアメリカでの選手生活の道を妨害したくはなかった、ということである。ただし、これがハコアには「重大な損失であった! (Es war ein schwerer Aderlass!)」ことは、バール自身も認めている。この移籍によってハコアは攻撃陣のすべてを含む 9 人 (ただし SC Hakoah (Hrsg.), *45 Jahre S.C. Hakoah Wien*, S.40 に掲載された同じバールの記述によれば 8 名) の著名選手を失った。残ったチームは自前の若手選手と外部からの戦力補強によってなんとか翌シーズンのリーグ戦は乗り切ったものの、観衆の激減ぶりは如何ともし難かった。そのためハコアは 1927 年に 2 回目のアメリカ遠征で財政的損失を補填しようとしたが、この遠征後さらに 4 人の中心選手をアメリカ移籍によって失うことになり、ハコアはスポーツ的な展望を完全に喪失することになった (1927/28 年シーズン後 2 部に降格)。Baar, *Fußballgeschichte*, S.130f ; SC Hakoah (Hrsg.), *45 Jahre S.C. Hakoah Wien*, S.40f
- 7) Keifu, *a.a.O.*, S.12
- 8) 1924-31 年の第 4 次入植期にパレスチナには約 8 万人のユダヤ教徒がソ連、ポーランドから入植した。一方、ナチの台頭期と重なる 1932-38 年の第 5 次入植期には欧州からの入植者数は急増し、前時期の 2.5 倍にあたる約 20 万人がポーランド、ドイツを出てパレスチナに根をおろしている。Angelika Timm, *Israel. Die Geschichte des Staates seit seiner Gründung*, Bonn 1998, S.348